



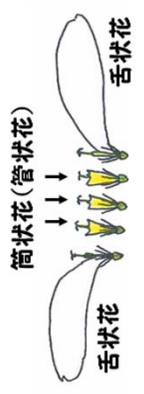


### 丹沢の白いキク

○秋の山道には、白いキクの花がたくさん咲いています。白い花びらの数や葉の形を注意して見ると、いろいろちがう種類があることが分かりますが、丹沢の山の上で秋に見られるのは、主に7種類ではないかと思われれます。

○キクの花びらは、ひとつひとつがそれぞれ「舌状花(ぜつじょうか)」「筒状花(管状花)」と呼ばれる小さな花になっています。また、中心にある黄色つぼいとひとつがそれぞれ花になっいて、こちらはアサミと同じで「筒状花(とうじょうか、つつじょうか)」と呼ばれます。

○キクもアサミも、近い仲間との間でしばしば雑種(ざっしゅ)をつくることが知られています。よく分からない花に出会ったら、くわしい図かんで調べてみましょう。



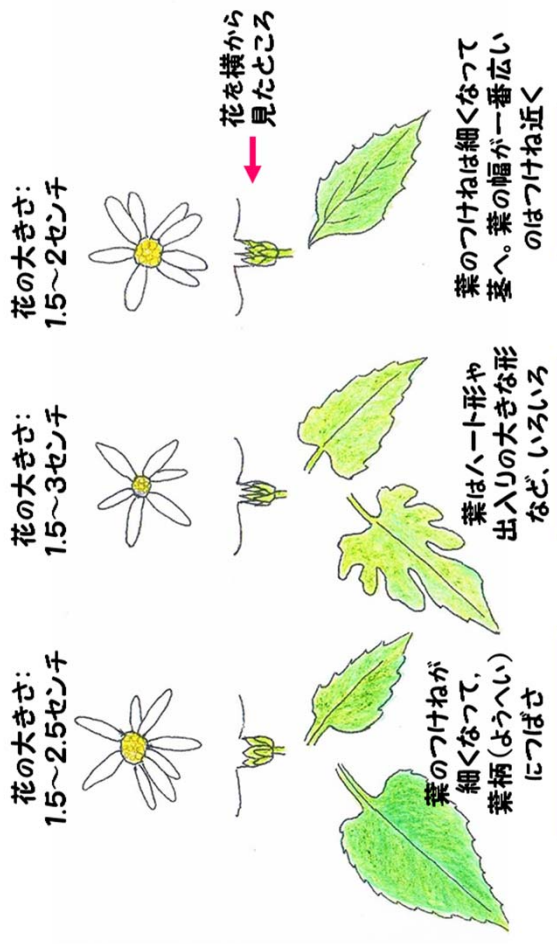
シラヤマギク

タテヤマギク

サガミギク

### 白い花びら(舌状花)が10枚以下

3cm



葉のつけねは細くなって茎へ。葉の幅が一番広いのはつけね近く

葉はハート形や出入りの大きな形など、いろいろ

葉のつけねが細くなって、葉柄(ようへい)につばさ

### 白い花びら(舌状花)が10~20枚

3cm



総ぼうが長い外側が長い

葉は細長い

葉のつけねは細くなつて茎へ、幅が一番広いのはつけね近く

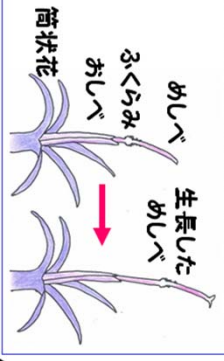
葉のつけねは細くなつて茎へ、幅が一番広いのは葉の中ほど

### アサミのふしぎ: その2

○アサミの花は、赤紫色のことが多い細長い筒(つつ)状の花(これを筒状花、または管状花と言います)がたくさん集まつて、ひとつの花のような形になっていきます。その、花の先をそつとなでると、白い小さなつぶつぶが出てくる場合があります。これは花粉で、花にやつてきた虫の体にくっついて、他の花に運ばれるのを待ちます。

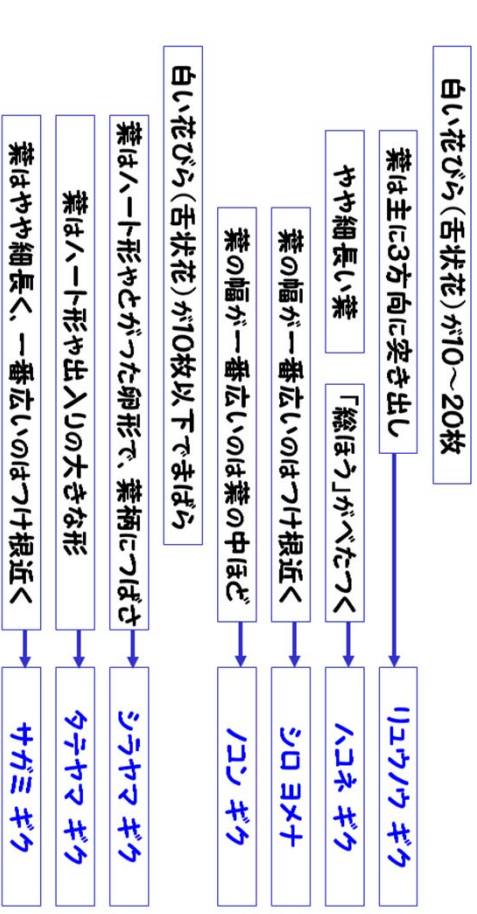
○アサミの花を虫めがねで見ると、筒状花の細い筒の中から、5本のおしべが重なりあつてできた管が伸び、さらにその中からめしべが伸びてきています。めしべの途中には小さなふくらみがあり、これは、おしべの管の内側にできた花粉をかき出す役目をもっています。

○花をさわると、それを感じたおしべの管が少しちぢむことがあります。この時、おしべの管に花粉がつまつていて、めしべの途中のふくらみがまだその管の中にあれば、花粉が押し出されてきます。





「総ほう」は、花のつけ根を包みこんでいる丸つこいところ、「葉柄(ようへい)」は、葉と茎をつないでいる部分です。なお、ノコンギクやハコネギクには、うす紫色の花も見られます。



3つのとんがりをもった葉が丹沢の山道に落ちていたら、ウリハダカエデかホソエカエデ、またはウリカエデではないかと思われれます。ウリカエデはとんがりか1つの葉も見られること、ホソエカエデは葉柄(ようへい)が長いことで見分けることができます(とんがりか1つだけのカエデの仲間には、ミツヅカエデ、チドリノキ、メグスリノキなどがありますが、ここでは省略しました)。



丹沢のもみじ:カエデの仲間のいろいろ

主なとんがりか3 主なとんがりか3から

**丹沢のもみじ：赤や黄色に色づくわけ**

○フナやカエデの仲間など、落葉広葉樹は、冬の弱い日ざしや低温では十分な光合成(こうごうせい)ができません。また、雪や水が葉についたときに、その重さを支える強さが小枝にはありません。冬には、乾燥(かんそく)や凍結(とうけつ)も心配です。そこで落葉広葉樹は、冬になる前に葉を落とす生き方をするようになりました。

○緑の葉には、ふつう緑色の色素(クロロフィル)と黄色の色素(カロテノイド)が含まれています。緑色の色素は光合成を行う大事な役割をもっていますが、冬が近づいて光合成があまりできなくなると分解してなくなり、後に黄色い色素だけが残って黄葉を生み出します。

○このとき、緑色の色素に代わって一時的に赤い色素(アントシアニン)が作られる場合には、木の葉が赤く紅葉することになります。緑色の色素の分解中に太陽の光を余分に受けると木の葉の細胞(さいぼう)が傷つく恐れがあり、赤い色素は、それを防ぐのに役立っているようです(アントシアニンやそれに近い色素全体は、アントシアンと呼ばれます)。

丹沢のもみじ:カエデの仲間のいろいろ

